自他の考えを意識してかかわり合い 自分の考えを更新する

古田　正樹

1　条件設定に当たって

日常の生活の中で課題に直面した時に，人は自分の経験の中から根拠となる知識を見出し，課題解決に至るための方法を考える。その際，他の考えというものは，自分にない経験から導き出された考えであり，自分の思考に刺激を与える。そのことにより，自分の考えを見つめ直し，考えを強化したり修正したりするなど，自分の考えを更新させていく。しかし，このような話し合いを行うに当たって二つの問題点が想定される。一つ目は，個々の経験から知識化されたものを根拠に話し合うために，話し合われる内容が拡散し，話し合う筋が明確にならないということである。一見は活発に見える話し合いが，話す側からの一方的な発信で終わる可能性がある。二つ目は，自分の考えの根拠が経験からくるものであるため，自分の中では根拠と考えのつながりが明確に感じられるため，話したり聞いたりする際の説明の不足に気付かないことである。その結果，話し合いの中で，何が明確になったかがぼやけてしまい，思考の深まりに至らない。以上のことを考慮しつつ，「自他の考えを意識してかかわり合い 自分の考えを更新する」を目指し，以下の三点を条件とした。

- **条件Ａ　共通の事実・体験を基に話し合っていること**
- **条件Ｂ　課題に対する自他の考えの関係を把握していること**
- **条件Ｃ　試して自分の考えを見つめ直していること**

2　条件について

・条件Ａ　共通の事実・体験を基に話し合っていること

子どもは自分の考えの根拠をこれまでの学習や生活の経験から導き出す。個々の経験は，同学年であっても違いがある。しかしながら，あたかもそれぞれの経験が共有されているがごとくに話し合いが進み，互いの意見が絡み合わずに，拡散し収束できないものになりやすい。個々の経験を大切にしつつ，思考を深めていくためには，共通の話し合いの土壌が必要である。そのために，共通の事実・体験を基に話し合うことが大切である。個々の経験を生かした考えも，事実・体験という共通項が存在するため，互いの理解が図りやすくなり，思考を深めることにつながると考える。

・条件Ｂ　課題に対する自他の考えの関係を把握していること

学習課題に対し自分が考えをもった時点では，他の考えの存在を意識することはあまりないであろう。そこで，話し合いに入る前に学習課題に対して，課題に対する自他の考えの関係を把握することが大切であると考える。自分がどのような考えに至っているのか，また，同じような考えをもった子はいるのか，そして，自分以外の考えが存在するのかなど，話し合う前に互いの関係（共通項のある関係，相違が見られる関係など）が把握できることにより，違うものが存在することを前提とした話し合いができ，他の考えを受容しやすくなるのではないかと考える。その結果，相手に合わせて表現を工夫することにもつながっていくであろう。

・条件Ｃ　試して自分の考えを見つめ直していること

学習の内容によっては，話し合いの中で見出した考えが適切であったかを試すことで，初めて知識となりえるものもある。例えば，体育科において，マット運動における開脚前転のポイントを互いに見合い，話し合う中で見出していく場面があったとする。そこで話し合われて見出されたポイントを意識することで開脚前転ができるという事実をもって初めて子どもたちはポイントの有効性を実感する。もし，試す中で上手くいかない部分があれば，どのような部分が足りないのかなど，新たな話し合いへとつないでいくこともできるであろう。以上のことから，試して考えの有効性を見つめ直していくことが条件として必要である。

3　おもな実践

条件Ａ，条件Ｂ，条件Ｃについては各教科の授業場面の中で多く設定しうる条件であると考える。そこで，教科にとらわれることなく，複数の教科で授業場面をとらえ，実践を積み上げることとした。

・条件Ａ　共通の事実・体験を基に話し合っていること

国語科の単元「本に親しみ，人間を見つめよう　～新しい友達～」では，学習課題づくりの実践を行った。子ども自身が学習課題づくりを行う際には，自分の読みを基に考えることが自然である。しかし，単元初期においては教材文の読み取りが不十分なため，自分に読み取れた範囲の中から課題づくりができないかを模索する傾向がみられる。また，物語の場合，読み手側が叙述から離れ想像豊かに登場人物について補足してしまい，結果的に叙述から離れた課題までつくられることがある。そこで，本単元では一人一人の最初の感想を発表し合い，感想発表の際に取り上げられた叙述を基に全文を概観する活動を行った。そのことにより，自分にない読みにも触れ，そして，物語の全体像をつかむことができる。つまり，この概観された内容が「共通の事実」となる。この「共通の事実」を中心に置き，登場人物の言動・行動の変化や読み取りの違いなど「矛盾する関係」という観点をもって，学習課題づくりに取り組ませた。まず，子どもは一斉で話し合うのではなく，近くの子たちと話し合うことを選択し，自分の考えを話し合い始めた。多くの子どもは，話し合う際に自分の感想が書かれたノートではなく，教科書をもち寄ったり，全文の概観がまとめられた摸造紙の前に集まったりして話し合っていた（写真１）。自分の読み取りだけにこだわるのではなく，全員で感想を出し合って見えてきた全体像から課題を見出そうとしたためであると考える。共通の事実である概観された内容を基に，登場人物の行動や心情の変化や登場人物の言葉に対する読みの違いに目を向けて話し合うなど，学習課題づくりに主体的に取り組むことができていた（資料１）。

次に，国語科の単元「インタビュー名人になろう」において実践を行った。インタビューについては，社会見学などで学習経験があり，テレビ番組などで目にすることもあり，ある程度の認識もある。しかし，その経験や認識は個によって違いがあり，インタビューにとって大切なことは何かを考える際に，聞き手に意図が十分に伝わらず，話し合いが拡散する可能性が推測できた。そこで，本単元では，＜インタビューにとって大切なことは何か＞という学習課題をつくり，それについて個々の経験から考えを述べ，話し合われた内容を基にしたインタビュー体験を行った。その後，体験をしたことを基に，再度，考えを見つめ直すような授業を展開した。つまり，このインタビュー経験が「共通の体験」となる。

授業の初期の段階では，それぞれの経験から「目的が大切である」という考えに至った。そこで，「目的がないと，インタビューは本当にできないのか」と問いかけ子どもの考えに揺さぶりをかけた。子どもは，上手くいかないという思いをもつもの

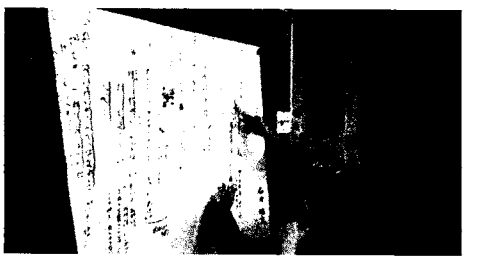

写真１　摸造紙の前で話し合う

Ａ児：「泣いちゃうって思ったんだもん」と書いてあったが，二人とも泣かなかった。それがなんか不思議や。それから考えたらいい。

Ｂ児：それを考えてもいいね。

・

・

Ｃ児：坂本君の「新しい友達だと思えばいいんだよ」という言葉に，「おかしなこと」と読んだ子と「やさしい」「すごいな」と読んだ子もいたよね。

Ｄ児：じゃあ，それも矛盾しとるんじゃないかな。

資料１　「矛盾した関係」に着目して課題作りをする

先生：目的がないインタビューを経験してもらいましたが，どうでしたか？

多くの子：（時間が）長い！

Ａ児：話すネタがなくなって長い。

Ｂ児：○○好きですか？　△△好きですか？　の同じようことのくり返しになった。

多くの子：なった。なった。

Ｃ児：同じようなことだけではなく，同じことが出てきた。

Ｄ児：聞く事もころころ変わって，相手も答えづらそうだった。

Ｅ児：（Ｄ児に）付け足しで，それもいきなり質問してくるからすぐに答えられない。

資料２　インタビュー体験を通してつながり合う話し合い

の明確な理由が述べられなかったり，個々の経験に違いがあるために十分に理由を伝えきらなかったりしていた。そこで，無作為にペアを作り，目的を提示せずにインタビューを行うという体験の場を設定した。これまでの経験上，目的をもたずにインタビューをすることがないため，子どもは，多少の戸惑いをもちながらも３分間のインタビューを行っていた。その後の話し合いでは，先ほどの体験を軸に考えが述べられるので，共感する自然な反応や積極的に付け加える姿が見られた（資料２）。体験を基に話し合うことで，自分の意図が伝わり，相手の意図が理解できる。その結果，共感的反応や付け加えをしながら考えを深めていくことにつながったと考える。

・条件Ｂ　課題に対する自他の考えの関係を把握していること

算数科の単元「小数と整数のしくみ」においては，まずは自分の考えをしっかり伝える経験を積むことを重視し，自他の考えにあまり相違のない関係においてペアで交流を行った。具体例としては，「２．３６は０．０１のいくつ分だろうか」という学習問題を提示し，答えを確認してからその答えに至った自分の考えを交流させた。すると，答えが同じであるという安心感もあり，ノートを指差し自分の考えを順序立てて話すなど自信をもって話をしていた。また，自分にない説明に出会った子どもは，相手の考えをノートに書き加えていた（写真２）。

以上のようなペアでの考えの交流を各教科においても日常的行い，自分の考えを述べることへの抵抗感を減らすように努めてきた。そして，「自分の考えを述べる」から「相手に考えを伝える」「相手の考えを理解する」という視点を意識するような働きかけることで，意識化が図られるようになった。

次に，自他の考えに相違が生まれる場面での実践を行った。

社会科の小単元「米づくりのさかんな地域」では，＜安全でおいしいお米をつくるための工夫を調べよう＞という課題を設定し，個々で調べ学習を行った。その後，「どんな工夫があったか」をたずねると，子どもは，自分の調べた内容から選択して，自分の中でよりよいと思われる工夫を挙げていた。黒板上では，「水の管理」「品種改良」「肥料の工夫」などのキーワードが並び，自分の選択と同様の子もいれば，違う子も存在することが黒板上で位置付けられた。これは大まかではあるが，「課題に対する自他の考えの関係」を認識した状態である。ここで，これまでと同様な形態の交流を行った。以前であれば，一人一人が順番に考えを伝える姿が多かったが，互いの考えを出し合ったり，違う考えの子に自分の考えを伝えきろうと身振りや具体的な資料を示しながら話したりする姿（写真３）が見られた。

これまでの条件Ｂに関する実践から，段階を踏まえながら互いの考えの共通点や相違点などの関係を意識して話し合うことをペアやグループで行うことにより，互いの考えに対する認識も変わってきたように感じられる。例えば，国語科の単元「本に親しみ，人間を見つめよう　～新しい友達～」において登場人物の行動から心情を読み取る際に，子どもの方から交流する時間を求める声が上がるようになってきた。「みんなに話す前に何人かに聞いてもらいたい」や「他の考え方があるような気もするから交流しながら考えたい」といった理由であった。全体で話し合う前に，自分の考えの妥当性や違う考え方がないのかを把握したいという思いをもつようになったと考えられる。また，算数科の単元「小数のわり算」において，小数を小数でわる際の考え方の学習では，多くの子が解法について考え方を見出したのに対し，上手く解法が見出せない子が少数存在するという場面があった。その時，解法を見出した子から「解き方がよくわからない方が少ないけど，その人の話から聞いた方がいい。その方が説明する時に気をつけて話すところが分かる」という意見が出てきた。その結果，解法が見出せない子の状態を把握し，状態に合わせた説明を行っていた。継続的に行うことで，他の考え

写真２　友だちの考えを書き加える姿

写真３　資料を指し示しながら違う考えの子に説明する様子

の存在を意識し，自分の考えを見つめ，そして，いかに相手に自分の考えを伝えるかを工夫するようになってきたと思われる。

・条件C　試して自分の考えを見つめ直していること

国語科の単元「インタビュー名人になろう」において，先に述べた条件Aの実践の後，条件Cの実践を行った。条件Aの実践の中で，インタビューには目的が必要であることについて共通体験を通して実感した。その次時に，「目的があればインタビューはうまくいくのか」と問いかけた。子どもは，前時の体験からうまくいくという確信をもっていたようであった。そこで，自分の考えたことを試す場の設定し，インタビュー側にのみ目的を伝え，前回と同様に3分間のインタビューを行った。体験後の話し合いでは，目的だけではインタビューは成立しにくいことに気付き，相手にインタビューするための準備の必要性にまで考えを至らせていた（資料3）。自分たちの考えたことを試すことにより不足に気付き，自分たちの学びを深めるに至ったと思われる。インタビューについて事前準備として必要なことを話し合い，「明確な目的」「質問内容の準備」「相手の答えの予想」など時間をかけて準備した。そして，このことについても試す場を設けた。インタビュー後の感想では，準備することによりインタビューをする側もされる側も以前の体験に比べ，「スムーズにインタビューができた」「事前の準備があったから落ち着いてできた」「話しやすかった」などよりよくなったことを話していた。

A児：目的だけでも，話が続かない。
B児：インタビューする側が長く感じてしまう。
C児：される方は，そんなに時間が長く感じなかった。
D児：目的がないよりは，しやすかったけど…。
E児：インタビューする方が，もっと準備が必要だと思う。

資料3　話し合いの中で考えを見つめ直す

写真4　作戦の相談をする様子

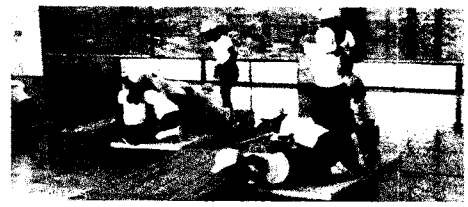

写真5　作戦を試す様子

体育科では，体つくり運動の中でマットを二枚使って行う「イカダ渡し」という活動の中で実践を行った。「イカダ渡し」とは，6人を1グループとし，二枚のマットから落ちることなく，マットを移動させながら体育館の壁から壁まで移動するという活動である。しかし，子どもにとって，この活動はあまり経験を生かすことができず，自分の考えが妥当であるとは言い難い。また，6人の考えをまとめて協力し合わなければならないため，話し合う必然性がある活動でもある。しかし，話し合うだけではうまくマット移動させることができるかがはっきりしない。そこで，試しながら自分たちのグループの作戦を立てることができるように十分な時間の確保を行った。話し合い，作戦を試す中で，互いの役割や動きについて明確にするグループや二つの方法を比較して考えるグループなどが見られた。互いの考えをもち寄り（写真4），かかわり合いながら試すこと（写真5）による作戦のよさを実感して，一つの作戦を立てるという集団で思考をする様子が見られた。

以上の実践から，話し合いで見出された考えを試して見つめ直すことにより，自分の考えの有効性を実感する姿が見られた。また，新たな課題を見出し，次のかかわり合いが生まれるという効果も見られた。

4　今後に向けて

以上のように条件について実践を積み上げてきたが，いくつかの課題が見えてきている。まず，共通の事実・体験を基にする分，思考の幅を限定してしまう傾向が感じられることがある。単元および授業のどの話し合いにおいて共通の事実・体験を条件設定するか，授業デザインという課題があると思われる。また，話し合う際のペア学習などが，目的に合わせて形態を選択していかなければならないが，目的意識が薄れてしまい形骸的な活動になりやすい。今後の実践の中で，これらの課題についても取り組んでいきたいと考える。